

気になるあの人 第4回

山川克則氏

村越 真

エリートでも、速いわけでもないのに、大会会場にいつもいて、威張っている、あのおなかの大きなおじさん誰？ そう思ったあなたへの答えがここにある。

異例の登場人物

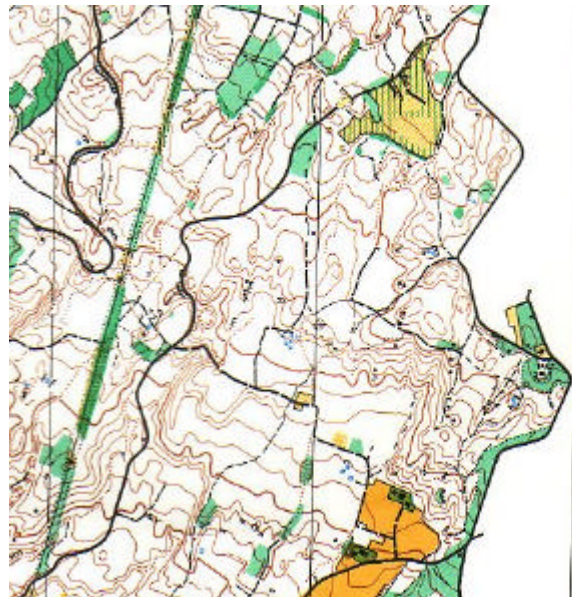
本連載は、もともと僕自身の個人的興味から始まった。大会会場ではよく出会い、親しく話しはする。一緒に大会運営なんかもしているが、その人の個人的なことについては何も知らない。マガジンのインタビューにかこつけて、そういう人たちの謎の部分聞き出してみよう、それが本連載の原点だった。その点、今号の山川克則氏は異例な人選だ。大学入学から20年来の付き合いの彼に、謎の部分などひとかけらもないからだ。

しかし世間一般の人から見れば、オリエンテーリングをやっている（走っている）わけではないのに、大会会場にはしばしば姿を現し、偉そうな顔をしている、あの人っていったい？ そりゃあ、確かに気になるな、ということで、今号は山川克則氏の登場である。

気分はブラックジャック

人里離れて暮らす天才外科医のもとに、難手術を余儀なくされた依頼者が現れる。その外科医は神技とも思える腕で患者を救い、巨額の手術代を請求する。手塚治虫の名作ブラックジャックに類するシーンである。その世界に憧れた少年のころの私は、こんな空想をよくした。

ある日、オリエンテーリング大会をまじかに控えた主催者が私のもとに現れる。「お願いします、先生。もう時間がないのです。それなのにこんなに未調査エリアが残っています。並のマップーには手に負えない地形なのです。」私は、現場に赴き、信じられないスピードで調査を終えると、巨額の調査費の払い込みを請求する。



山川氏、渾身の力作 APOC 5「ふじ」マニュアルマップの最高峰である。

この空想が現実のものとなった。1月の末、私のもとに山川氏から電話があったのだ。1992年のことだ。「もう時間がない。恵那に入ってくれ...」恵那の山奥からの電話だった。現地へ赴いてみると、悲愴な状況だった。メインエリアは半分も調査が終了していないし、しかも、イカレタ原図に難病とも思える微地形、時折の降雪。アフリカの奥地で、手術の設備もないのに難病に直面したブラックジャック気分を、僕はこのとき満喫した（ただし巨額の調査料は夢と消えた。詳しくは恵那インカレ報告書テクニカルアドバイザーレポートを参照のこと。このレポートは僕のウェブページ (<http://www.ipc.shizuoka.ac.jp/~ehsmura/>) にも採録されている）。

この調査レポートは静大の学生からも「調査に対する考え方を変えた」と評価されたが、僕自身の調査に対する考えもいっぺんさせた。悟りを開いた禅僧のように、調査は僕にとって一種の修行ともなった。今ではたいいの調査も極楽と感じられるようになったのも、山川氏のおかげと言えるだろう。

その後も常磐インカレでは、2月中ごろの30cm以上の積雪が残る里美の山に呼び出され、インカレまで一月にも満たないというのに、膨大な範囲を与えられた（いやあ、あの時は寒かった。夕方になると木の枝に霧氷がついてたりしてね）。

閑話休題。いやしかし、こういうエピソードこそが、山川氏の人となり伝えるには最適ではないかとさえ思う。

転機

山川氏とオリエンテーリングの出会いは小中学時代の野外活動にさかのぼるといえる。そこでオリエンテーリングを「少しかじった」彼は、二浪の末晴れて東京大学に入学する。そこで黎明期の東大OLKに出会い、オリエンテーリングを再開した。長距離タイプとはいえない彼だが、当時の彼はそれなりにしまった体つきだった。地図そのものにも関心が高かったせいか、技術的には上達も速く、今では想像もつかないことだが、1年の末には優勝候補とさえ言われたインカレ補欠選手になっていた。

そんな彼の針路を大きく変えたのが、2年生の時のインカレ騒動だろう。この年、実行委員会を結成するOB側と学生側の新聞社後援に関する意見の食い違いから、インカレの開催が危ぶまれる事態が生じた。結局インカレはなんとか開催にこぎつけるのだが、学生であった山川氏も運営に大幅に関わることになり、トレコースの地図作りにも携わっている。それ以来、彼は学連の運営に大きく関わることになり、学連と彼の深い関係は今日まで続いているわけだ。

プロへの道

そんな日々のある日、僕と山岸は当時かれの住居であり学連事務所である文京区音羽で、「これからオリエンテーリングにどう関わる」本音トークをしたことがあった。彼が何を言ったか忘れたが、僕が「オリエンテーリングと心中する気はないよ」といい、山岸氏が「オリエンテーリングと心中してもいいよ」と言ったのだけは覚えている。

オリエンテーリングを人生の中心において生きているという点では、山岸氏の言葉は3人すべてに当てはまり、その中でしたたかに社会と関わっているという点では僕の言葉が正しかったわけだ。

その後、彼は学連と心中するかのように大学に8年間在籍していたことを知る人はもう少ないが、日本で唯一のオリエンテーリングのプロとしてRMOサービスを設立、100枚以上の地図作成に関わっていることは、多くの人の知るところである。

その後彼は、多年の無理もあってか、腎臓の機能不全に陥り、最低でも3日に一度は透析を受ける日々の中、地図調査にかかり続けている。



自慢の謄写版道具を使って、合宿のコース印刷をする山川氏。
1980年10月撮影

最大の功績は...

山川氏が手がけた数々の0-mapは、もちろん日本のオリエンテーリング界の財産であろう。しかし、それ以上に彼の日本のオリエンテーリング界への貢献だと、僕が評価するのはクラブカップ7人リレーを開始発展させたことである。北欧でも、スウェーデンのティオミラ、フィンランドのユッコラなど著名なリレーは、多くの地域クラブの重要なターゲットとなっている。それが、選手にとってもよいモチベーションとなっている。これはその国のオリエンテーリングの発展には欠かせない要素である。

今や1000人以上の参加者を集めるクラブカップ7人リレーは、重要な日本の地域クラブの目標となり、それが選手の掘り起こしや復活に与える影響は少なくない。あの節操のないアナウンスはなんとかしてよとは思いますが、それもクラブカップ7人リレーの盛り上がりがあればこそである。



大学2年時の山川氏。おなかのラインに注目！

プロとしての原点

そんな彼が、昨年5月にメール上でこんな発言をしていた。

「今のオリエンティアは、山川と村越が同じ大学の同級生だったって知っているのだろうか？ マッパーとしての評価なんかよりずっと興味あります。まあ生き残るという点では、2人ともかなりしつこいウチではあるわね」

僕が高校時代で作ったガリ版の地図を見たことを彼は鮮明に覚えているようで、「家に私をさそっては、それらの作品を自慢げに語っていました。そのうちのオフセット印刷なのはごく少数、そのほとんどが彼の手作業によるガリ版印刷でした。そんな彼のありようにごく憧れ、自分もメラメラと地図作りの興味が沸いてきて、よし俺も作ってやると意気込み、2年の夏には、水道橋のガリ版専門店にてバイトして得た大枚4万円くらいをはたいてセット一式買い込み、廻田（今の多摩湖畔？）のガリ版地図を作ったのが、今の私の原点かなあ、と思います。」と、当時のことを回想している。

プロの地図作成者である彼のキャリアの原点に自分がいるということは光栄なことだ。ちなみに、彼は4人の子持ちだが、長男の晋也（しんや）君が、僕と山岸氏にちなんで名づけられたことを知っている人も、今ではほとんどいないのではないだろうか。

その意味で確かに気になる存在ではあるし、なにより納期にちゃんと地図をあげてくれるかなとやきもきさせてくれるという点では、僕にとって彼が気になる存在であることは間違いない。

（村越 真）